

泌 尿 器 科 紀 要

第 11 巻 第 3 号

昭和 40 年 3 月

随 想

ABO 血液型と泌尿器疾患

奈良県立医科大学助教授 林 威 三 雄

奈良医大の所在地は成人式に教育勅語の配布問題で話題となった大和橿原市である。私は毎日近鉄橿原神宮駅で降り、駅前から橿原神宮と神武天皇御陵前を通る鬱蒼とした樹林の中の約2軒の道をバスで通っている。2月11日は旧紀元節であつた。平素の欠礼のお詫びかたがた橿原神宮に参拝した。普段は全く閑散としている駅前からの表参道にも色々の店が並び、広い神域内にもこの日ばかりは流石に人出が多かつた。日の丸の小旗をもつた参拝客には、昔軍人であつたことを感じさせる人が多く、それらの人々の年令から見て、戦後の時の流れの速さに今更乍ら驚いた次第である。この日には橿原市では神宮の行事を中心として、種々の催しがあり、神武天皇時代を思わせる衣装に身をつつんだ人々の行列もあつた。2月始めとは思えない春の様な陽気に誘われ、参拝後病院まで歩き乍ら考えたことである。参拝客に老令の人々が多かつたことからかも知れないが、この奈良県には昔から胃癌が多いと云われている。これは所謂「大和の茶粥」とよばれる食習慣によるもので、茶を入れてたき上げた熱い粥によつて、くり返し胃粘膜が刺戟される為であろう。その地方独特の食事内容がこの様に或る疾患と結びついている事例は他にもこれを聞くことが出来る。

話は異なるが、近時血液型と各種疾患との間に関係があると云う報告をかなり見る様になつた。例えば最近では Fadhli et al. (1963) の ABO blood groups and multiple cancers や、Seifert (1964) の Magenkrebs und Blutgruppensystem と云う様な論文がある。前者に於ては St. Luke 病院で20年間に経験した5,769例の全ての癌症例の中、血液型のはつきりしている123名の白人にみられた重複癌について血液型との関係についてしらべた結果、統計学的に明らかにA型のものに多かつたと云う。これに対して後者の論文では胃癌と血液型との関係については色々の意見がある様だが、著者が1,000人についてしらべたところでは、特に明らかな関係は見られなかつたと述べている。胃癌との関係について書かれたものが中でも多い様で、それによるとA型に多いと云う意見が圧倒的である。十二指腸潰瘍ではO型に多く、糖尿病はA型に多く、又唾液腺腫瘍は良性、悪性を問はずA型に明らかに多いと云う報告もある。その他心筋障碍、悪性貧血、膀胱癌、乳癌、肺臓癌等も問題にされ、賛否夫々相半ばしている様である。泌尿器疾患についてはどうであろうか。この問題については残念乍ら少数の論文を見るのみであつた。前立腺疾患についての Seiarra et al. (1960) の論文では、150例の前立腺腫瘍について見たところ、癌はO型に多く、肥大症はA型に多かつたと云う。又 Beasley (1964) は前立腺肥大症についての論文を集め、A型に多いと云う関係は統計学的に見られなかつたと云う。他は腎結石についての Pesce (1961) の報告で、その結論は腎結石はA B型とB型に多発の傾向があつたが、これは他の人々がO型とA型に多いと云う結果とは異ると云うものである。

然し常識的に考えて食習慣と病気との間に関係はあり得べきことでもあろうが、血液型と

の間に関係を意識づけることは、丁度血液型によつて個人の性格が判定出来ると云う様な考えと同じ様な気がしてならない。ABO 式血液型は御承知の如く1901年 Landsteiner らにより発見され、以後個人識別の分野でめざましい発展を遂げたとは云え、既に発見以来60余年たつている。輸血や腎移植あるいはある疾患の際に、凝集性の変化から血液型が変る（例えばA B型→O型）と云う新しい領域に関連して問題とされるならば兎に角として、近来疾患との関係で問題とされ出したのは、何かこじつけの様な感じがして釈然としない。正直なところ私自身その様な関係については半信半疑であつた。然し乍ら、これを解決するためには、当然数字を以て表さなければならぬであろう。幸い以前このことについて些かしらべたが、適当な発表の機会のないままに放置していた。今回この様な機会を与えられ、気楽な堅苦しくない文章でよいと云う稲田教授の御言葉に甘えて、私の調べた成績を簡単に発表させて頂く。

泌尿器科入院患者 2,346 名（この中には楠教授の御理解により阪大の症例が多数含まれている）の中、主な疾患と血液型との関係の実数を百分率で表わすと次の表の様であつた。

	例数	O 型%	A 型%	B 型%	AB型%	型不明例数
古畑氏（近畿地方壮丁）	31,603	30.5	38.1	21.8	9.6	
泌尿器科入院全症例	2,346	34.1	37.1	20.8	8.0	356
上部尿路結石	430	34.2	39.9	17.9	8.0	32
腎腫瘍	39	36.8	23.7	34.2	5.3	1
腎盂及び尿管腫瘍	26	44.0	44.0	8.0	4.0	1
膀胱腫瘍	257	26.8	34.9	27.7	10.6	22
前立腺悪性腫瘍	73	33.3	40.6	17.4	8.7	4
前立腺肥大症	300	38.8	32.9	18.3	10.0	27
睾丸腫瘍	27	18.2	50.0	27.3	4.5	5
陰茎癌	13	30.8	61.5	0	7.7	0
尿路結核	224	35.6	37.1	19.0	8.3	19
性器結核	78	31.8	34.8	26.1	7.2	9

対照としては泌尿器科全入院患者の百分率と共に、古畑教授の統計をも引用させて頂いた。単なる数字の羅列であつて、これをどの様に判断するかにはその人の主観が多少影響するであろう。私自身特に注意して見たのは前述の論文の事もあつたので、尿路結石症と前立腺癌及び肥大症とについてであつた。その結果は上部尿路結石症については殆んど対照と同様の傾向で、特にAB型、B型に多いと云うことはなかつた。むしろこの表の数字だけを見れば、膀胱腫瘍にその様な関係を見られる。

そこで問題を前立腺癌と肥大症の2つにしぼつて見た。表の実数からでは少くとも Seiarra ら結果とは全く逆である。即ち癌はA型に多く、肥大症はO型に多くなつている。Seiarra らの結果の判定方法は不明であるが、当然統計学的に解決する必要がある。そこで私も統計学の中、分布型の適合度検定におけるカイニ乗分布 (Chi-Quadrat-test) を用いて検定を行つた。くわしい数字は省略したが、その結果少くとも危険率10%以下では有意の差があるとは断定出来なかつた。要するに私の成績からでは、泌尿器疾患と血液型との間に統計学上関係は認められないと云うのが結論である。

折角貴重な紙面を頂いたにも拘らず、貧しい内容となつた。然し私自身にとっては一夜殆んど夜明け迄、数人の学生諸君と本統計の処理方法について議論し合つた有意義な楽しい時を持ち得たのは何よりの喜びであつたし、それにもまして統計学を多少とも学ぶ機会を得、そのむづかしさと重要性を改めて認識し得たことは貧弱な結果の代償として得た最も大きな報酬であつた。